

令和 5 年 10 月 26 日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K03238

研究課題名(和文) 児童書に見る文化的スクリプトとその媒介者としての親：日中米の比較研究

研究課題名(英文) Cultural scripts in children's storybooks and the mediating role of parents:
Comparisons among Japan, China and the U.S.

研究代表者

向田 久美子 (Mukaiida, Kumiko)

放送大学・教養学部・准教授

研究者番号：70310448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本と米国の代表的な絵本・児童書に関して図書館の推薦リストを元に入手した。日米比較を行うため、コーディング・スキーマを開発し、169冊の米国書、182冊の日本書における登場人物、経験と出来事、エンディングを中心に分析を行った。分析の結果、米国の絵本・児童書にはハッピーエンドが多いほか、個に焦点を当てた作品が多いこと、日本の絵本・児童書にもハッピーエンドが多いものの、死や別れといった悲しいエンディングも見受けられること、年長の子どものための絵本・児童書になると、アメリカでは差別との闘いや多様性、日本では戦争や自己犠牲といった、より深刻なテーマが現れてくることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本と米国の児童書の内容分析を通して、物語スキーマの共通性と差異を見出すことができた。児童書は子どもを社会化・文化化する機能をもっていると考えられることから、これらの知見は日米の子どもの語り(スクリプト)の違いを理解する上で重要な知見になると思われる。

研究成果の概要(英文)：This research compared American and Japanese children's books in terms of cultural story schemas. Overall, 169 American books and 182 Japanese books were selected as popular children's books, based on recommendation lists by public libraries in each culture. As a result of structured content analysis, American books were more likely to have a happy ending and to focus on individuality than Japanese books. Japanese books included not only a happy ending but also a sad ending such as death and separation. The books for older children tended to deal with more serious themes in each culture, including diversity and anti-discrimination in American books, and war and self-sacrifice in Japanese books.

研究分野：発達心理学

キーワード：スクリプト 比較文化 物語スキーマ 児童書 内容分析

1. 研究開始当初の背景

研究代表者らはこれまで、個人の行動を方向付ける認知的枠組みとしての「スクリプト」に着目し、それらが文化によって異なることを示してきた (Mukaida et al., 2010)。日中米の作文の比較を行った結果からは、日本では具体性と主体性に欠け、行動や結果よりも状況や内面を綴るパターン、中国では具体的な方略を明示し、苦楽を伴いながら上昇をめざすパターン、アメリカでは否定要素が少なく、肯定的な結末を綴るパターンが優勢であることが示されている。このようなスクリプトはイベント・スキーマとも言われ、「人の行為が状況にどのようにはたらき、どのような経過をたどり、どのような結末にいたるかについての常識的な期待」(東, 2005)と定義される。

スクリプトの獲得・形成には、親や教師、仲間との直接的なやりとりに加え、子ども時代に聞く物語の内容や解釈が影響することが示唆されている (Nelson, 1981)。子ども時代に聞く物語としては、絵本や昔話、教科書などの文化的産物があるが、日本とヨーロッパの昔話を取り上げた研究では、物語スキーマに普遍性ととも文化固有性があることが示されている (Mukaida & Crane, 投稿中)。普遍的な傾向としては、日欧ともにハッピーエンドで終わる物語が多いことが挙げられる。文化固有性としては、ヨーロッパでは若いヒーローの冒険 (苦難の克服) がハッピーエンド (結婚や富の獲得) によって締めくくられるパターンが多いのに対し、日本では、おじいさんやおばあさんがよい心がけによって思いがけない幸 (富) を得るパターン、同じく若者がよい心がけによって幸 (配偶者や富) を得るも、最後に掟を破ってすべてを失ってしまうパターンが優勢となっていた。

本研究では、物語スキーマの文化差が昔話以外にも認められるのかどうかを検討するために、児童書 (創作絵本や童話など) に焦点を当て、それらに描かれる物語の特徴について日本・中国・アメリカの3文化圏比較を行う。

2. 研究の目的

日本と中国、アメリカの3カ国でロングセラーとなっている児童書を抽出し、それらの内容分析を通して、物語スキーマの普遍性と文化固有性について検討する。いずれの文化圏においても、主人公が何かしらの困難に出会い、援助者の力を得て、成長していく物語が主流であると予測される (Meletinsky et al., 1969)。しかし、プロットは同じでも、その語り口 (スクリプト) に文化差があると思われる。先行研究 (Mukaida et al., 2010; Mukaida, 2014; 渡辺, 2004) からは、アメリカでは主人公の主体性や力強さ、出来事の因果関係、ハッピーエンドを強調したスクリプト、日本では主人公の思いやりや健気さ、和解による問題解決 (もしくはすれ違い) を強調したスクリプト、中国では主人公の刻苦奮闘と知恵、社会的上昇を強調したスクリプトが、それぞれ優勢であることが予測される。さらに、こうした文化的スクリプトは、低年齢の子どもに向けた作品よりも、年齢の高い子どもに向けた作品の中で、より顕著に見られる可能性があるとして予測される (Mukaida, 2018)。年長の子ども向けの作品では、年少の子ども向けの作品に比べて、描かれる世界が広がり、登場人物やプロットも複雑化してくるため、より文化的な特徴が反映されやすくなると考えられる。

3. 研究の方法

まず、日中米の各文化圏でロングセラーとなっている児童書を選出する。各文化圏で公開されている児童向け推薦図書リストなどを参考にし、幼児・小学校低学年向け (おおむね 4~8 歳) を約 100 冊、小学校中学年・高学年向け (おおむね 9~12 歳) を約 50 冊選出する。続いて、内容分析を行うための通文化的なコーディング・スキーマを開発する。コーディングの主なカテゴリーには、登場人物、出来事・経験、エンディングが含まれる。それらはさらに下位のカテゴリーに分類される。訓練を受けたコーダー2名が幼児・小学校低学年向けの書物、別の2名が小学校中学年・高学年向けの書物について、独立してコード化を行い、それぞれの一致率を見る。一致率が十分に高い場合、各カテゴリーの有無、文化に共通して見られるスクリプト・パターン、文化固有のスクリプト・パターンを明らかにする。

4. 研究成果

日本とアメリカの代表的な絵本・児童書に関しては、主要な図書館の推薦リストを元入手した。残念ながら、中国において同様のリストを見つけることができなかつたため、3カ国比較は断念した。

日米比較を行うため、コーディング・スキーマを開発し、169冊の米国の児童書、182冊の日本の児童書における登場人物、出来事と経験、エンディングを中心に分析を行った。年少児向けの書物、年長児向けの書物に対して、それぞれ2名がコーディングを行った。両者とも一致率が高かったことから、カテゴリーごとに分析を行った。その結果、予測と一致して、日米ともにハッピーエンドで終わる物語が多くなっていったものの、その傾向は米国の児童書において強く見られることがわかった。また、年少の子ども向けの書物では、日米ともに主人公の子ども (もし

くは動物)に対して共感できるような内容が多く見受けられた。日米で差がみられた点として、アメリカの児童書では、個に焦点を当てた作品が多いこと、日本の児童書では、ハッピーエンドが多いものの、戦争や死、別れ(健気さ)といった悲しいエンディングも見受けられることが示された。

年長の子ども向けの児童書においては、日米の共通点として、予測通り、主人公が何かしらの困難に出会い、それを克服する中で成長していく、というスクリプトが多く見られたが、その傾向はアメリカの年長児向けの児童書において強くなっていた。そのほか、アメリカでは差別との闘い(主体性や力強さ)多様性、日本では戦争や自己犠牲といった、より深刻なテーマが現れてくることが明らかにされた。これらの傾向は、仮説を一部支持するものとなった。

なお、今回は、個々のカテゴリーに見られた文化差を指摘することはできたが、文化固有のスクリプト・パターンを見出すには至らなかった(特に日本の児童書)。昔話を題材とした先行研究に比べると、児童書の世界がより多様であることに加え、絵本においては絵に語る部分が大きく、テキストのみの分析では目立った文化的パターンを見出すことが難しかったためと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 向田久美子
2. 発表標題 児童書の児童書の主人公の名づけに見る文化差：日米比較から
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------